

編著者まえがき

一 ハザールとは

ハザールは六世紀中頃ヨーロッパの東部に出現した騎馬民族である。出自はさだかではないが、民族集団として注目を受けるようになって以来トルコ系騎馬民族の様相を色濃く持つ。出現当初は遊牧を行い、トルコ系言語を話し、謎めいた突厥文字を使用する。彼らは近隣の民族を圧倒し、七世紀中頃王国（カガン国）を築き、黒海・アゾフ海・カスピ海沿岸草原、クリミア半島に覇を唱えるが、キリスト教のビザンツ帝国とイスラム教のアラブ帝国の狭間に立ってユダヤ教を受容して国教とするという史上稀有に近い行動をとる。王国の底辺を支えた民の人種は雑多と想像されるが、国家建設の中核となったのは、百七十年余にわたって万里の長城の内外で中国と激烈な死闘を演じ、ついに唐の粘り強かつ奸智にたけた軍事・

外交の前に敗れ去り、新天地を求めて西へ走った突厥の王家阿史那氏あしなの一枝であつたこともまた興味を引く。まさに東西交流の要所にあつて、両者を強く結びつける役をはたした民族であり、国家であつた。

ムハンマドの死後まもなくアラブ勢力は急速に強大化し、近辺諸国をかたっぱしから征服し始める。北に向つた大軍勢はカフカスへと突入するが、それに立ちはだかつたのは雪を頂く峨峨ががたる山脈だけではな
い。要所要所を固めていたハザールの組織的軍隊であつた。防衛軍は伝統的騎馬戦闘術（例えば馬車による円陣）までも繰り出して、果敢な抵抗を行い、侵入軍を幾度も南へと撃退する。

もし、アラブ軍がカフカスを通り抜ければ東ヨーロッパはもちろん、中央ヨーロッパへの道は広々と開かれたであろう。ロシアもポーランドもハンガリーも、はては、チェコもイスラム化したかもしれない。

ハザールはアラブとの戦役を一世紀余にわたり闘い抜き、イスラム勢力の東方からのヨーロッパ侵入をくいとめ、現在あるかたちでのキリスト教世界を守つたのである。それは、カール・マルテル指揮下のフランク王国騎兵軍がピレネーを越えて進撃してきたアラブ軍をトゥール・ポワティエ間の戦で撃退したのに比肩される歴史的大功績であると言うキリスト教世界の学者もいる。しかし、一方は歴史の教科書に大書され、ヨーロッパ人には常識となるのに対し、ハザールの「功績」は忘れられ、無視されてきたのは、そのルーツが我々と同じアジア人であつたためであらうか。それとも国教がユダヤ教であつたためであらうか。

ユダヤ人はローマ帝国により国家を奪われ、国無しの民として世界に離散流浪し、迫害に晒されるが、中世に至つて、ハザールというユダヤ教国が東方の遙かかなたの草原のどこかにあるという噂を耳にし、驚き、鼓舞され、ハザール国探索活動を展開する。

最も熱心かつ精力的であつたのは、十世紀中葉スペイン、コルドバの後ウマイヤ朝の外交・通商・財政

の大臣の地位にあったユダヤ人ハスダイ・イブン・シャブルトであった。彼は、恐らく世界各地に張り巡らされていたであろうユダヤ商人の情報・連絡網を頼りに、ハザール国王に手紙を届け、返書を受け取ることに成功する。二人の往復書簡は千余年の時の破壊力に耐え、現在に伝えられ、学者によって解読される。また、十九世紀末にはカイロのユダヤ教会堂の文書秘蔵庫から大量の古文書が出てくるが、その中にハスダイに宛てたとおぼしい無名氏の書簡やハザールのユダヤ教市民の救済活動に関する文書が発見され、ハザール国の内情がより細密に描けるようになる。

これだけでも伝奇に満ちた一篇の物語となるが、ハザール史そのものは現在に生きる我々に興味尽きない問題と謎を投げかける。

現在、イスラエル軍のアラブ人居住地域への侵攻によっておこる人道危機を前にして、世界の注目は中近東に注がれている。イスラエルを構成するユダヤ人とは一体誰かという問題に対する関心が高まっている。政治や国際関係に関心がない人でも、学芸分野や政界・経済界でのユダヤ人の天才・実力者の活躍には目を見張らざるを得ない。

このように世界で耳目を集めるユダヤ人の大部分は、モーセなど『旧約聖書』に登場するユダヤ人とは全く関係なく、十世紀末ルシ（ロシア）に滅ぼされた後、東欧に離散したハザールの末裔であるという説が広まっている。もしこれが本当なら、血で血を洗う戦争を繰り返し、今も流血の惨事を日常的にひきおこす原因となったイスラエルの建国とは一体何だったのか、ということになりかねない。そのような説が正しいかどうか、曲がりなりにも判断するためにはハザール史のある程度正しい知識が我々に今必要とされる。

ハザールが東アジアの島国に住む我々日本人にとりなぜ面白いかは、日本の建国に関し騎馬民族説が声

高に唱えられるというだけではない。ハザールでは二重王権ダブルキングシップが実践されていたということが一つの理由となるのではなからうか。

日本論を解くキーワードの一つに天皇制があるが、それは二重王権として存続してきた。二重王権はすでに邪馬台国の昔からある。女王卑弥呼は「鬼道に仕え」神がかりとなって神託を伝えるシャーマンであり、聖的権威を担う。政治の実務を担当するのは弟であり、俗的権力を握っていた。この聖俗の権力が二身に分離するシステムは、国の乱れを予防する目的で導入されたという文脈で『三国志・魏志倭人伝』の中に置かれているのも興味をそそられるところである。

ヤマト政権では天皇は聖的権威と俗的権力を兼ねそなえていたかのように思われるが、すぐに「天皇不執政」説が取沙汰される状態になる。「聖」「俗」の一身の集中と二身の分離は時代によって多少傾きが異なるとはいえ、二重王権の流れは天皇家と藤原氏、天皇と將軍、「天皇機関説」が問題にされる中での昭和天皇と軍閥というかたちで、一本の屋台骨のようにして日本史を貫く。精神的「権威」と実務的「権力」の分離とその使いわけによる体制維持は、家・町村組織・会社・官庁・大学、あらゆる組織に埋め込まれている。

この「二重王権」はハザール史のテーマでもある。ハザールのカガンは「聖」を演出し、精神的権威を担い、將軍ベグ（ないし王）は「俗」を代表し、徴税権など絶大な世俗的権力を持ち、集めた税金も勝手に使い、それに関しカガンに報告義務がない。カガンを位につけるのも將軍である。しかし、彼はカガンの前では跪拜くわいはいしなければならない。当時ハザールの地を旅したアラブの旅行家・地誌家の証言による事実説明やその仕組については、本書第一部第五章にゆずるが、ハザールの二重王権の実態は、日本の政治体制をより深く理解するための恰好の外在的対比物を提供する。

丸山眞男がかつて天皇制の中に見出した無責任体制は日本特殊論の文脈の中でとらえられてきた。しかしハザール史を知ると、無責任体制は二重王権というシステムそのものの中に危機処理装置としてはめ込まれており、それは世界各所にさまざまな体制の中に広く存在するのではないかという疑いを我々の中に呼び起す。ハザール史の知識は天皇制論議の深まりにも、また、体制維持とは何かという認識の深化にも役立つもののように思われる。

二 本書の構成

本書は三部よりなる。

第一部は、スヴェトラナ・プレトニョヴァ著『ハザール』(130)の全訳である。「謎の帝国」と副題を添えたが、同書の和訳が一九九六年に新潮社から刊行された折、同社編集部と相談の上付加されたものであり、その踏襲である。

第二部は、ユダヤ・ハザール往復書簡の翻訳である。ユダヤ・ハザール往復書簡は次の四文書から成る。

- 一 ハザール皇帝ヨセフ宛ハスダイ・イブン・シャプルトの書簡
- 二 ハザール皇帝ヨセフの返書(短小版)
- 三 無名ハザール・ユダヤ教徒の書簡
- 四 ユダヤ・ハザール往復書簡出版に際してのイサアク・アクリシの序文

一を「ハスダイ書簡」、二を「ヨセフ書簡」、三を「無名氏書簡」、四を「アクリシ序文」と略称する。

原文は全て古ヘブライ語であり、一、二、四はココフツォフ『十世紀ユダヤ・ハザール往復書簡』(119)に掲げられた露訳から、三はゴルブ、プリツァク『十世紀ハザールのヘブライ文書』(41)に掲げられたゴルブによる英訳からの重訳である。

ココフツォフ、P・K(一八六一—一九四二年)はロシアの東洋学者。セム系言語の研究者、ロシアにおけるヘブライ学の創始者である。サンクト・ペテルブルグ大学東洋語学部卒。一九三〇年まで当大学で教鞭をとる。先に掲げた書(119)は原典翻刻・翻訳・注釈の模範といわれる。

ゴルブ、N(一九二八—二〇二〇年)はアメリカのヘブライ学者。ユダヤ史専攻。シカゴ大学教授。ウクライナからの移民の子弟。死海文書の研究、「キエフ文書」(14:305-311)の発見・研究で知られる。

現時点においてユダヤ・ハザール往復書簡の内容の概略的把握の一助になるかと思ひ、これらの露訳・英訳から訳出した(将来ヘブライ語に堪能な史家によって訳されることを心より願う)。逐語訳には意義が認められないため、平明さを目指して訳すよう努めた。

第三部「ハザール探索小史略」は三章に分かれる。

第一章「手紙による探索」は、発信、発刊順に並べたユダヤ・ハザール往復書簡の解説である。第二章「からみつく政治」は、近代社会の駆動力でもあり宿痾でもあるナシヨナリズムと革命の乱反射を浴びて立ち現れるハザール像の変遷を跡付ける試みである。第三章「ハザール——謎の帝国」をめぐって」は、日本におけるハザール紹介の一端に触れると共に、第一部『ハザール——謎の帝国』の解説と著者プレトニョーヴァ訪問記に当てる。